

IECニュース

No.39

July 2007

企業とIEC

システムオンチップで高まる重要性



株式会社 ルネサス テクノロジ
会長 & CEO 伊藤 達
(社)電子情報技術産業協会常任理事

最近世界的に工業製品の標準化の重要性が増していますが、半導体製品に関連する標準化活動には、半導体製品の製造に関わるものと、半導体製品を使う立場に立ったものがあります。前者は半導体製造装置メーカーと連携して、日本の各企業は積極的に推進してきました。一方、後者の使い方についての標準化活動では、半導体製品のピン配置やパッケージの形状から始まり、インターフェースの仕様にまで拡大してきまし、「半導体の標準化」という言葉で意味することは、まだ入出力信号の電圧やタイミングなど物理レベルの話に留まることが多いと思われます。

一方、集積回路技術とシステム技術の発展によって、従来は半導体の外にあったアプリケーションが、現在は半導体の内部に集積されるようになり、半導体の標準化が扱うべき範囲は大きく拡大し、さまざまなアプリケーションの標準化と切り離せないものになっています。すなわち、標準化されたアプリケーションは半導体製品という大量生産可能な部品を使うことで初め

て爆発的な市場浸透力を獲得でき、半導体製品も標準化されたアプリケーションを組み込むことにより初めて巨大な市場に自らアクセスできるようになりました。特に急成長している広大なアジア市場でシェアを獲得、保持するためには、標準として認知されることが必須となっています。このように半導体製品の市場浸透力が標準化仕様に左右されるようになるにつれて、ビジネスと標準化が切り離せないものとなってきています。

また、中国のWTO加盟やWAPI標準化提案などに見られるようにデファクト標準だけでなく、デジタル標準もビジネス戦略に重要なものとなっています。このように、半導体ビジネスは、標準化戦略を事業戦略の柱の一つとして位置づけられなければならない環境に置かれています。

このような市場環境におかれながら、国際標準化における日本のリーダーシップを見ると、欧米の諸団体がFTP等の仕掛けを使って比較的短期間に国際標準化を実現するしくみを持っているのに対して、日本からの提案力は弱く、残念ながらリーダーシップを発揮しているとはいえない状況です。標準化戦略をビジネス戦略の柱の一つとする必要がありながら、日本の国際標準化におけるリーダーシップは不足しております、標準化をビジネス戦略に組み込んで自在に使いこなすには不十分であると言わざるをえません。個々の企業が一層の努力をする必要がありますが、同時に国としての力やJEITAを中心とした業界団体としての力も結集してレベルアップを図る必要があります。そのためにも、JEITAでの国際標準化事業には重い役割があると考えています。

ルネサス テクノロジは半導体企業として標準化戦略をビジネス戦略の柱の一つとするとともに、JEITAでの国際標準化事業にも上記観点から支援していきます。またその成果には大いに期待しています。

目次

企業とIEC システムオンチップで高まる重要性 伊藤 達 (株)ルネサス テクノロジ	1p
日中韓情報電子国際標準化フォーラム発足に向けて 原田節雄 IEC標準監修評議会	2p
SMB東京会議報告 JEITA-JEMA-APC-JISCの協力で推進した 日本初開催のIEC/SMB会議	4p
WSC The Fully Networked Car Workshop の概要 平川 秀治 東芝(株)	4p

TC/SC/TAの紹介 TC113 ナノエレクトロニクス 春日義夫 NECエレクトロニクス(株)	6p
事務局だより 委員会の新しい愛称とロゴマークの決定 事務局	6p
2007年度 国際標準化対応支援委員会 総会開催 国際標準化対応支援委員会新委員長ご挨拶 中尾邦道 富士通(株)	7p
国際標準化対応支援委員会による国際会議出席者 2007年1月～2007年6月 事務局	8p

特別寄稿

日中韓情報電子国際標準化フォーラム(仮称)発足に向けて



原田節雄

IEC標準管理評議会（SMB）
日本代表委員

はじめに

今、JEITA主導で日中韓情報電子国際標準化フォーラム(仮称)がスタンディングな会議体として発足しようとしています。このフォーラムの仮称は、CJK-SITE (CJK-Standards cooperation on InformationTechnology and Electronics) となっています。今秋には、日中韓の企業、団体、政府が参加して正式な総会が開催される予定です。それに先立って6月には幹事会(予定)が北京で開催されることになりました。

背景

このCJK-SITE (仮称) は、その名前が示すとおり、情報電子関係国際標準化に関して、日中韓の各國間の対話と協調を図るビジネスツールとして生まれようとしています。今日まで一年半近くをかけて、その設立に向けて各国と交渉し、国内審議団体事務局とも調整をしてきました。

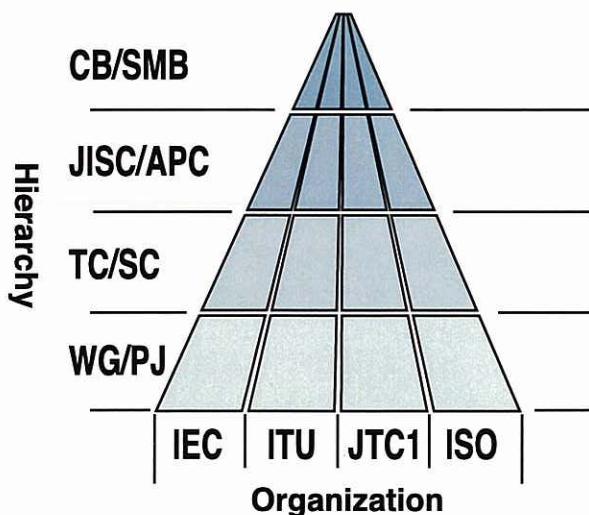
- ・2005年12月、METI産業技術環境局、国際室長と調整官への説明と協力依頼
- ・2006年2月、スイス、ジュネーブでのSAC代表Su氏とGuo氏への説明と参加打診
- ・2006年5月、KATS (韓国工業技術院) への電子メールによる参加打診
- ・2006年8月、中国、北京でのSAC/CESIとの会議体設立事前会議
- ・2006年10月、ドイツ、ベルリンでのKATSのDirector、Lee氏への説明と参加要請
- ・2006年12月、中国、海南島での中国ハイアールへの参加要請
- ・2006年12月、韓国、ソウルでのKATS/KSA/サムソン、LGとの会議体設立事前会議
- ・2007年3月、中国、北京でのSAC/CESI/KSAとの最終詰めの会議

国際標準化の場は、細切れのフラグメンテーション状態にあります。IECやISOなど、複数の組織が分野別縦割構造で存在し、その個々の組織内でさえも分野別縦割構造になっています。さらに、その個々の分野別縦割構造組織が階層別横割構造になっています。本来、一つの組織として一体化して標準化を進めるべきところが、縦横割構造になり、その個々のフラグメントが

孤立した状態に近くなっているのです。国際標準化専門家や組織事務局職員を問わず、そのフラグメントの一つで働く人には、複数フラグメントで構成される組織全体が見えません。

一方、国際標準化後進国の中は、国際標準化と知財戦略を政府主導で展開し、国内標準化組織の縦横割構造を崩し、一枚岩の標準化体制を維持しようとしています。日本の産業界は、国際標準化において、中国を相手にして非常に不利な組織体制だと思います。

Fragmentation of International SDOs



半導体、電子部品、自動車などの産業を考えると、それらは日米欧に分散しています。その国際標準化バトルは、日米欧の三極構図が普通です。しかし、実際の国際標準化バトルでは、欧米対日本の構図の下、日本は負け続けています。

近年、日中韓に産業が分散したエレクトロニクス分野では、すでに日米欧のバトル構図から日中韓のバトル構図へ移行しています。そこで中韓対日本のバトル構図になったら、まったく国際標準化の話にもなりません。日本のエレクトロニクス産業界は、この問題にどう対応しようと考えているのでしょうか。

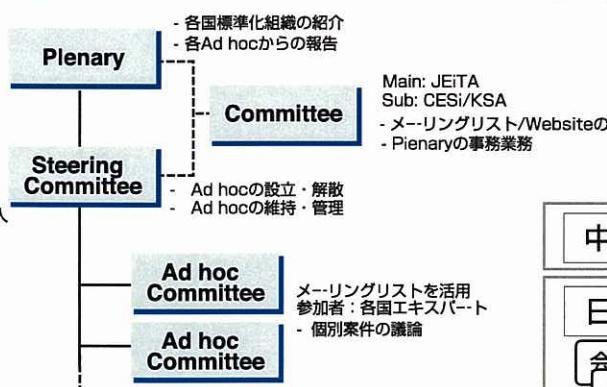
目的・構成

CJK-SITE構想のきっかけは、中国提案のWAPI国際標準化の問題です。2004年、中国が提案したWAPIの国際標準化が纏めに纏めて、中国はそれを国際標準でなく、自国独自標準として制定しました。理由はともあれ、国際市場で大国を孤立させてはなりません。

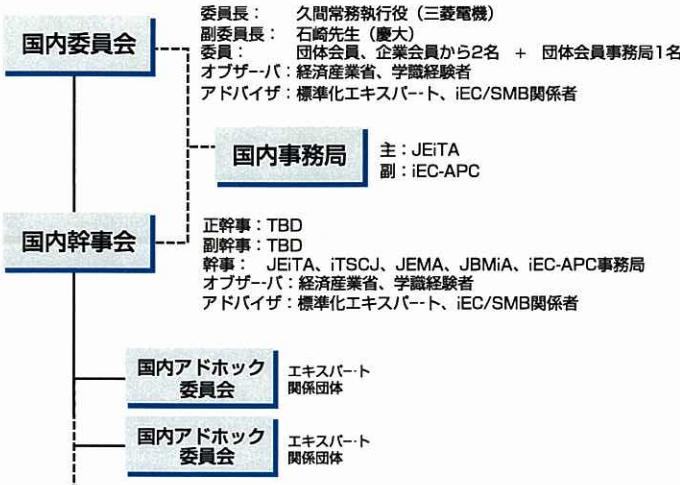
CJK-SITE の組織

年1回
各國持ち回り
議長：ホスト国
参加者：会員
オブザーバ

Plenary前
必要に応じて開催
議長：ホスト国
参加者：各MAX5人
オブザーバ



国内対応委員会組織（案）



CJK-SITE 設立の目的は、標準化の組織と分野を跨いで、国際標準化に関する企業、団体、政府が一丸となって、アジア地域の国際標準化協調を推進すること、それに国内の国際標準化対応体制を強化すること、この二つです。その組織構造は以下のようになる予定です。

会議体構造

CJK-SITE Plenary (総会)
 CJK-SITE Steering Committee (運営)
 CJK-SITE Coordinator (事務局)
 CJK-SITE Ad-hoc Committees (技術議論)

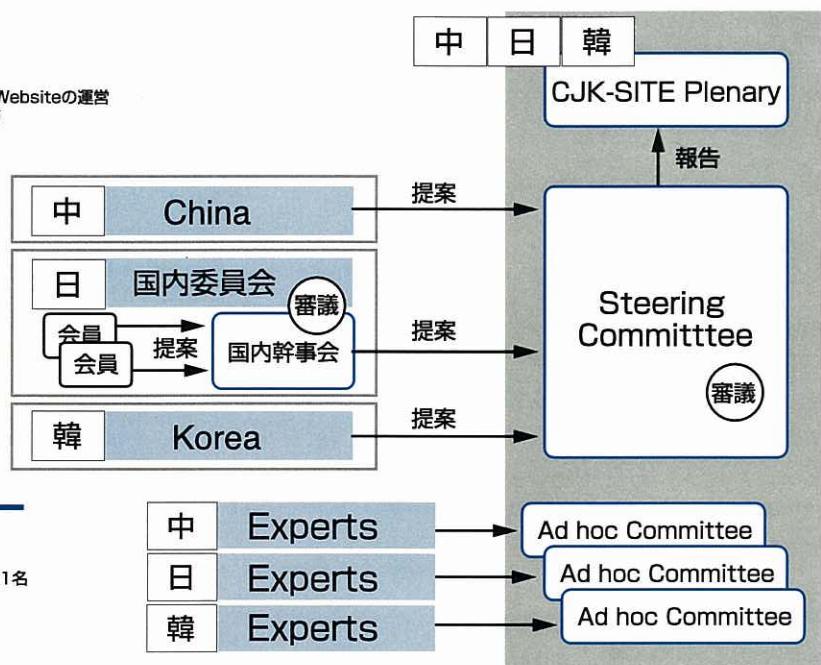
団体会員

中国: CESI
 日本: JEITA/ITSCJ/JBMIA/JEMA/IEC-APC
 韓国: KSA/KEA/KETI

民間会員

中国: ハイアール、レノボ（予定）
 日本: キヤノン、富士通、富士ゼロックス、コニカミ

Adhoc Committee 設立フロー



ノルタ、マイクロソフトジャパン、三菱電機、NTT、
 オラクルジャパン、セイコーエプソン、東芝、ソニー、
 松下電器、日立製作所、シャープ、NECなど
 韓国: サムソン電子、LG電子

政府関係（オブザーバの立場で参加）

中国: SAC
 日本: JISC (経済産業省)
 韓国: KATS

CJK-SITEも工業会活動なので、中小企業会員の不利益に対して、代表的なメーカーが、その意見を代弁し、その行為を代行します。会議体はスタンディングでも、その利用はアドホックで構いません。必要なときに、必要な人が、必要なだけ利用する、そういう会議体を目指しています。参加団体の会議メンバーなら、誰でもAd-hoc委員会で意見が出せます。また、「情報交換」と「会議報告」も、手段であって目的ではありません。必要なのは「標準化ビジネスの成果」だけです。

おわりに

国際標準化の場に立つ海外各国代表委員の後ろには、常に国際ビジネスに目ざとい各企業の存在があります。ドイツのミュンヘンに建つシーメンス本社の会議室の壁には、「国際標準化こそ、自社のビジネスそのものだ」という標語が掲げられています。日本国内にも、JEITAを求心力にして、画期的なクロスインダストリー、クロスレイヤーの国際標準化対応国内体制が完成しつつあります。



会議風景

本年2月15日、SMB会議が東京で開催され、日本からはIEC/APCの原田氏（日本代表委員）とMETIの松本補佐（代行委員）が出席した。今回は、日本電機工業会（JEMA）の好意により、JEMAの大会議室を会議場所にした。アドホック会議やIEC事務局の準備会議なども含めて、複数の会議が同時開催されたので、それについてもJEMAの会議室を利用させてもらった。

SMB東京会議報告 日本規格協会APC事務局

同日8時半に議長のMr. Kitzantidesの開会宣言で会議が始まった。METIからは、基準認定局の松本審議官に出席いただき、日本を代表して冒頭の挨拶をしていただいた。今回、15カ国のSMB委員および代行委員のほかに、METIの長野室長（ISO/TMB代表の立場）もゲストとして出席された。また、CB-TFが同時開催されたので、三木CB委員（松下電器）など、3名のCB委員の出席もあった。

今回の会議で特筆すべきことは日本勢の活躍だ。TC100からは平川氏がTC100の活動を説明した。TC111からは森氏がTC111の活動を説明した。地味な題材が

WSC The Fully Networked Car Workshop の概要

平川 秀治

東芝（株）
TC100国際幹事



写真1 PALEXPO(ジュネーブ市展示場) 入り口



写真2 ワークショップ会場



写真3 IECから挨拶

(1) 日 時：2007年3月7日水曜日、8日木曜日、9日金曜日午前

(2) 場 所：ジュネーブ（スイス連邦）

(3) 出席者：平川秀治（東芝/TC100国際幹事）、由雄淳一（パイオニア/TC100 エキスパート）、その他、ISO関係、ITU関係で日本からの参加者多数

（4）概要報告

World Standards Cooperation (WSC)は国際標準化三団体であるIEC、ISO、ITUの上級役員、事務局が国際標準化について話し合う組織である。そのWSCは輪番で特定のテーマで毎年講演会を開催している。セキュリティ、医療分野など先端技術に焦点を当て、技術・市場動向や最近の成果・成功事例、トピックスなどを紹介しながら、国際標準化に関わる現状の課題、将来展望について自由に討論する。昨年は、IEC主催で「Digital Technologies in the Home」をテーマに、報告者も運営委員としてセッションの司会、パネル討論に参加した。

今年は、輪番でITU-Tが主催、「Fully Networked Care」というテーマで、ジュネーブ自動車ショーに合わせて3月7日水曜日から9日金曜日の午前中までを会期としてワークショップを開催した。参加登録者はモーターショーのプレス招待日に入場できるバッジ付きということもあり350名であったが、実際のワークショップ参加者は約200名程度であったと思われる。

また、上の写真1、2はモーターショー、ワークショッ

プの会場であるPALEXPO（ジュネーブ市展示場）とワークショップ会場の風景である。

今回のワークショップについて、主催者であるITU-Tの立場を予想すれば、市場が飽和してきている携帯電話事業者が、「自動車」一台一台に携帯電話番号を付与して加入者にしたいということであった。市場もその方向に動くとするプレゼンが目立った。

半導体メーカーのプレゼンによれば、自動車に使われているプロセッサは1994年には45 MIPSであったものが2008年には、1150 MIPS、バス帯域幅は700 kbit/sから23 Mbit/sになると予想し、半導体、ネットワークの需要が強まるとしている。現在は、普通の乗用車で40個、高級車では100個のマイクロコントローラを使用しているとのことで、ソフトウェアの検証も大変な作業になってきた。

TC100からは、自動車用ネットワークは、ホームネットワークとともにEnd-userネットワークの一部となっている、End-userネットワークはTA 9というグループを作って規格課作業を開始したという報告をおこなった。

1日目（3月7日水曜日）

今回の主催者ITU-Tの新DirectorであるMalcolm Johnsonから歓迎の挨拶、IEC（Amitの代理でJack Sheldon）、ISO（Alan Bryden）から今回のワークショップの開会に際し、それぞれの立場から挨拶があった。

その後のプレゼンでは、元東大教授でトヨタ情報技術

多いIECとしては、どちらの話題も今日の標準化題材として脚光を浴びている。また、池田氏（東芝、SB1議長）にもSMB議長に特別許可を貰い出席してもらった。SB1報告に引っ掛けて、日本主導の1100kV超高压伝送の国際標準化への理解を得ることが目的だった。

エネルギー効率および自動車用電子に関して、戦略グループ（SG）を設立して標準化検討を始めることになった。エネルギー効率SGはドイツがリードし、カナダ、中国、スペイン、フランス、イギリス、イタリア、日本、アメリカがメンバーになった。自動車用電子SGは日本がリードし、ドイツ、フランス、イタリア、韓国、アメリカがメンバーになった。最近の自動車には電子技術が多用されており、JEITAの部品、半導体、製品関係の会員企業のビジネスにも深く関係していく。JEITAの積極的な関与が求められる。

また、WSCで審議されているIPR取扱のITU/ISO/IEC共通ガイドラインも話題になった。規格文書中の小数点記号をカンマからピリオドに変更する件も討議され、ISOとの共同検討にブラジル、スペイン、フランス、ドイツ、韓国、イギリス、日本、アメリカが参加することになった。

IEC/APCとしては、国際会議事務局を担当するのは初めてだったが、JEMAの協力の下、成功裏に会議を終了することができた。国際会議開催の裏方には、それなりのノウハウが必要だ。国際標準化の上層対応だけでなく、会議開催、技術審議などにおいて、JEITAとIEC-APCの協力関係をさらに進めて、日本主導の国際標準化に貢献したい。これで国内初のSMB東京会議も無事終了した。ご協力いただいた関係者各位に深く感謝する。



センター所長の齊藤忠夫先生から、自動車の自動運転、衝突防止システムのシミュレーション結果、2G、3Gの携帯電話、WiMax、WLAN、DSRCの活用、CALM（Communication Architecture for Land Mobile Use）への期待、等の話があった。また、ホームネットワークとの関係も言及した。（写真3、4）

2日目（3月8日木曜日）

報告者がパネリストとして参加した「Panel Discussion on Standards」が朝一番のセッションであった。

参加者は、ISO TC 22(Road Vehicles)議長のJean-Pierre Cheynet氏、IEC TC 100(Audio, Video and Multimedia Systems and Equipment)国際幹事の平川秀治（報告者）、ITU-T SG 12 (Performance and quality of service)議長のJean-Yves Monfort氏（フランステレコム）、ETSI (European Telecommunications Standards Institute)事務総長のWalter Weigel氏、ISO TC 204(Intelligent Transport Systems)副議長の川嶋弘尚（慶應大学教授）であった。

それぞれの立場から、The Fully Networked Carに対する標準化の成功例、課題について報告し、質疑応答が行われた。

報告者は、自動車のネットワークは、ホームネットワークとアプリケーションレベルでの互換性が重要であること、IEC TC 100では既にDLNA Guide Line Ver 1.5をISにしたことを報告した。（写真5）

第3セッションは、Standards がテーマで、IEC TC 100から由雄淳一氏（パイオニア）が参加。TC 100としては、自動車ネットワークは、End-userネットワークの一部で、ホームネットワークとの関係を十分、考慮する必要があると強調した。（写真6、7）

3日目（3月9日金曜日）

今回は、三日間の開催であったが、最終日はIEC CB-Task Force The Third Leg 検討会合があり、この会合を優先したため、WSC会合には参加できなかった。プログラムとプレゼンテーションは、IEC、ITU-Tなどのホームページから入手できるので、興味のある方は参照願いたい。URLは変動があるため、ここでは掲載しないことにした。

（5） 結び

本稿では、本年3月に開催されたWSC主催のWorkshopの概要を紹介した。IECが主催であった昨年に続き、本年もWSC Workshopに「標準化」をテーマとしたパネル討論に参加することになった。また、JEITAからはホームネットワークと自動車ネットワークの関係を「音声、映像とマルチメディア」の関係から説明するプレゼンも行われ、IEC TC 100のこの分野での活動をITU-T、ISO側にも紹介することができた。今後のWSC Workshopも関係するテーマであれば、JEITAから積極的に参加することが必要である。

TC113 ナノエレクトロニクス

戦略的対応が必要とされる国際標準化会議

春日 壽夫 NECエレクトロニクス(株)
TC113国内委員会幹事
SC47A国際幹事

1. IEC/TC113設立の経緯

IEC/TC113(電気・電子分野の製品及びシステムのナノテクノロジ標準化、以下ナノエレクトロニクス)は、2005年5月に、①製品TC/SCsにおけるナノテクノロジ標準化活動を調整、②ナノテクノロジの科学的調査段階から市場での応用や、製品標準開発の段階への移行に関する助言、③他の標準化機関とのリエゾン関係の確立を目的とすることで、設立が決定された。

ISO/TC229(ナノテクノロジ)とのリエゾン案が各国に照会され、2006年9月のSMB会議で、TC113幹事国及び議長が決定され、TC113が正式に発足した。

2. 第1回フランクフルト会議の構成

IEC/TC113(ナノエレクトロニクス)の第1回会議が、2007年3月26~28日にフランクフルトで開催された。参加者は11カ国1委員会計32名であり、ドイツ：8名、日本：6名、カナダ：3名、米国：2名、英国：2名、韓国：2名、イタリア：2名、フランス：1名、シンガポール：1名、中国：1名、オーストラリア：1名、IEC-CO：1名、ISO/TC229：2名)であった。

委員長(Chairman)は、米国のDr. J. Thomas Chapin(UL: General Manager)が務めた。国際幹事は、ドイツのDr. Norbert Fabricius、副国際幹事は、ドイツのMr. Gerd Weking(TC48の委員長を兼任)が務めた。



TC113参加者全員



TC113会議風景

3. 会議の概要と成果

今回は、IEC/TC113の第1回会議であるため、主に活動方針の審議を行なった。その結果、

- ・カーボンナノチューブを中心としたナノテクノロジの標準化活動を既に開始しているISO/TC229との共同活動を第1とすること、
- ・他の委員会活動(たとえば半導体標準化委員会)に関わる活動が勝手にされないようにすること、
- ・技術開発の妨げとなる標準化がなされないようにすること(Scopeから「Design and Development」を削除)等に関して日本の意見を反映させた案をまとめることが出来た。

さらに、米国が国際議長、ドイツが国際幹事を取っており、日本も計測分野のWGの国際コンビナ積極的に引き受けることに成功し、国際貢献して行くことになった。

全体として、事前に検討した日本の対応方針にはほぼ沿った形の結果となつた。

次回は、2007年12月にシンガポールで開催されることになった。

4. 所感

もしも、日本がコメントしなければ半導体にかかわる規格が既存の委員会外で審議されかねない危険な状況であったが、SC47A国際幹事として小職が参加していたので、TC47とのリエゾンを考慮する事になった。

今回の会議参加に当たっては、経産省の後藤課長補佐、松本課長補佐及びTC229国内委員会メンバである産総研湯村様、セイコーインスルツ古田様及びJEITA企業代表として東芝吉田様に、事前及び会議中において、情報の収集・分析、対応案策定に直接に関わって頂き、審議において有効な対応が可能となった。まさに、産官学(ISO、IEC国内委員会)の協力の下、効果的に、戦略的な活動が行うことができた。

事務局だより

シーサップといいます。

本国際標準化対応支援委員会では、その新愛称について検討しておりましたが、6月14日のPR委員会にて「シーサップ(CISAP)」に決まりました。同時に、新しいロゴも左のように決まりましたのでご紹介いたします。



Committee of International Standardization Activity Promotion

2007年度 国際標準化対応支援委員会 総会開催

(旧IEC活動推進委員会)



2007年度国際標準化対応支援委員会（旧IEC活動推進委員会）総会が、5月30日(水)、神田駿河台山の上ホテル 銀河の間にて開催された。

審議承認された議案は以下の通りである。

議案：1. 前回議事録の確認

2. 2006年度 事業報告書（案）
3. 2006年度 収支決算報告書（案）
4. 2007年度 委員会役員の紹介
5. 2007年度 事業計画書（案）
6. 2007年度 収支予算書（案）
7. TSC-06（国際標準化対応支援委員会）補助基準・運用規定
8. TSC-05（国際標準化対応支援委員会）運営細則



新役員の方々 左から中尾委員長 樋口副委員長 賀川副委員長

今年度の国際標準化対応支援委員会新役員は以下の方々である。

委員長	中尾 邦道 殿	富士通（株）
副委員長	樋口 和雄 殿	シャープ（株）
副委員長	賀川 和義 殿	アルプス電気（株）
監事	平川 秀治 殿	東芝（株）
監事	平盛 誠 殿	TDK（株）

なお、総会開催の後、社団法人日本鉄鋼連盟 標準化センター事務局長 大橋 守氏を講師に迎え「鉄鋼業界の標準化動向（国際規格とビジネス、連盟での国際規格化への対応）」をテーマとした講演会を開催した。

その後、同ホテル別館に場所を移して出席者による懇親会を開催し、出席者相互の歓談の時を過ごした。

新委員長ご挨拶

国際標準化対応支援委員会委員長

中尾 邦道 富士通（株）

今年度、改称されました「国際標準化対応支援委員会」の委員長を拝命致しました。

ここ数年、国際標準化の重要性がようやく認識されつつあり、昨年末には政府・知的財産戦略本部が「国際標準総合戦略」を公表し、経済産業省は国際標準化戦略目標を設定いたしました。JEITAでは今年度は「国際標準化への取組みについて」において取組みの体制強化をうたっており、本委員会もそれに相応しい名称に変わりました。

ご承知の通り、今年度からJEITA組織改革により標準化センターは大幅に改組され、各々の標準化委員会は分野別部会へ移管、統合されましたが、「IEC活動

推進」の機能は全体で運用すべきとの意見が強く、継続して本委員会が行うことになりました。しかしながら活動補助支援のあり方、運営の効率化、会費負担の公平化と会員減少対策、IEC以外の国際標準化活動支援の拡大等の懸案事項を昨年度から議論してきましたが、合意・決定には至らず、今年度も継続して検討することになっております。運営費用については根本的な課題であり、本年度の委員会役員の方々にはご苦労をお願いすることになりそうです。

国際標準化活動を効果的に支援出来る体制づくりに努めたいと思いますので、皆様方のご協力をよろしくお願い致します。



講演会風景



懇親会風景



国際標準化対応支援委員会補助による

国際会議出席者

2007年1月～2007年6月



Committee of International Standardization Activity Promotion

SC3D/WG2

電子部品のデータ要素／部品のクラス分けと技術データ要素の定義
2007年2月14日～16日 ドイツ／ミュンヘン
南野典子（東芝）

SC23J/MT1、2

機器用スイッチ
2007年5月23日～25日 スウェーデン／ストックホルム
四宮繁樹（アルプス電気）

TC47/PT62258

半導体デバイス／半導体ペアダイプロジェクト
2007年1月15日～16日 ベルギー／ブリュッセル
永広祐一（東芝）

SC47A/WG9

集積回路／EMC測定方法
2007年4月16日～17日 イタリア／トリノ
齊藤義行（松下電器産業）、中村 篤（ルネサステクノロジ）

SC47A/WG2

集積回路／デジタルIC
2007年4月18日～19日 イタリア／トリノ
三谷真一郎（日立製作所）、横溝剛一（ルネサステクノロジ）、市川浩司（デンソー）

SC48B/WG3、5、6

コネクタ
2007年5月21日～23日 デンマーク／コペンハーゲン
小島恒雄（タイコエレクトロニクスアンプ）、河合 徹（日本航空電子工業）、小林和幸（第一電子工業）

SC62A/JWG7

ITネットワーク接続機器のリスクマネジメント
2007年1月11日～13日 米国／サンディエゴ
中里俊章（東芝）

SC62A/MT23

医用電気機器の共通事項／EMC
2007年2月27日～3月2日 米国／バナマシティ
中田和成（東芝）

SC62A/JWG6

医用電気機器の共通事項／在宅用医療機器
2007年3月26日～30日 ドイツ／フランクフルト
中谷 敬（日本光電工業）、石田伸司（テルモ）

SC62A/JWG1

医療電気機器の共通事項／リスクマネジメント
2007年4月2日～5日 ドイツ／フランクフルト
市川義人（オリンパス）

SC62A/WG14

共通安全規格の試験
2007年5月2日～4日 ドイツ／ミュンヘン
内藤正章（日本光電工業）

SC62A/JWG3

医用電気機器の共通事項／ソフトウエア
2007年5月9日～11日 ドイツ／ライプツィヒ
中里俊章（東芝）

SC62D/MT16

医用電子機器／内視鏡
2007年3月13日～17日 ドイツ／フランクフルト
市川義人（オリンパス）

SC62D/MT17

医用電子機器／高周波手術器
2007年5月21日～23日 ドイツ／ベルリン
三堀貴司・市川義人（オリンパス）

TC80/WG1

レーダ・プロッティング装置
2007年1月22日～24日 英国／ロンドン
小松裕昭（古野電気）、田北順二（日本無線）

TC80/WG6

デジタルインターフェース
2007年2月6日～8日 英国／ロンドン
田北順二（日本無線）

TC80/WG7

ECS（電子海図システム）
2007年2月19日～23日 米国／アーリントン
田北順二（日本無線）

TC80/WG14

基地局／航法支援AIS
2007年5月7日～11日 米国／フロリダ
矢内崇雅（沖電気工業）、古山賢二（日本無線）

TC80/WG1

レーダ・プロッティング装置
2007年5月14日～15日 英国／ロンドン
小松裕昭（古野電気）

TC80/Plenary

総会
2007年5月22日～23日 ノールウェー／オスロ
矢内崇雅（沖電気工業）、田北順二（日本無線）

TC87/WG9

超音波／パルスエコー診断装置
2007年3月20日 ドイツ／シュツットガルト
近藤敏郎（徳島文理大学）、岸本真治（日立メディコ）

TC91/ACEA

電子実装技術
2007年4月23日～24日 スイス／ジュネーブ
潮 憲樹（パナソニックエレクトロニクスデバイス）

TC91/WG2

電子実装技術
2007年6月7日～8日 シンガポール
梅垣淳一（日本電気）、荒金秀幸（ソニー）

TC100/TA9

オーディオ・ビデオ・マルチメディアシステム、機器及びエンドユーザ
ネットワーク
2007年3月1日 中国／北京
江崎 正（ソニー）

TC100/PT61606-3

デジタルオーディオ測定方法／プロフェッショナル用途
2007年5月6日 オーストリア／ウィーン
古川雅通（ケンウッド）

TC100/AGS

戦略諮問会議
2007年5月16日～17日 ポーランド／ワルシャワ
小町祐史（大阪工業大学）、由雄淳一（バイオニア）

TC100/AGM

マルチメディアシステム及び機器、運営諮問会議
2007年5月17日 ポーランド／ワルシャワ
平川秀治（東芝）、江崎 正（ソニー）

TC100/TA1/PJ62487

放送用エンドユーザー機器
2007年1月11日 米国／ラスベガス
伊賀弘幸（東芝）

TC100/TA4/MT61937-2

デジタルシステムインターフェース＆プロトコル
2007年5月4日～5日 オーストリア／ウィーン
由雄淳一（バイオニア）、市村 元（ソニー）、江崎直樹（松下電器産業）

CISPRI/WG2、4

マルチメディア機器等に関するEMC
2007年1月8日～9日 フランス／パリ
千代島敏夫（PFU）、堀 和行（ソニー）

JEITA (社)電子情報技術産業協会

Japan Electronics & Information Technology Industries Association

〒101-0062 東京都千代田区神田駿河台3丁目11番地 三井住友海上駿河台別館ビル3階

TEL 03-3518-6421 FAX 03-3294-8721 [http://www.jeita.or.jp]

知的基盤部 Intellectual Property and Technology Department
TEL 03-3518-6434 FAX 03-3295-8727

企 画／国際標準化対応支援委員会

発 行 人／中尾邦道 国際標準化対応支援委員会委員長

印 刷／三協印刷株式会社

〒152-0002 東京都目黒区目黒本町5-20-7

TEL 03-3793-5971